

坂の上の星雲^{せいうん}

西郷 西盛

第一章 黎明編

第二話 進

余談ながら、私は銀河100年戦争、あるいは銀河大戦というものをこの物語のある時期から書こうとしている。もちろん100年間のすべてではなく、地球人が参戦することになった最後の30年余についてである。

小さな。

といえば、この頃の太陽系ほど小さな星系は銀河系になかったであろう。世界といえば、八つの惑星と数個の準惑星しかなく、外宇宙へ出た有人宇宙船といえは、通常動力のみで何十年もかけて往復する、神代計画の希望号八機しかなかった。この小さな、銀河の片田舎のような星系が、外宇宙への本格進出と同時に恒星間文明と血みどろの対決をしたのが銀河100年戦争である。

その対決に、辛うじて勝った。その勝った収穫を後世の地球人たちは食いちらしたことになるが、とにかくこの当時の地球人たちは精一杯の智恵と勇気と、ほんの少しの幸運をすかさずつかんで運用する基礎科学

力と外交能力のかぎりをつくしてそこまでこぎつけた。いまからおもえば、ひやりとするほどの奇跡といつていい。

その奇跡の演出者たちは、数え方によっては数億もおり、しほれば数十万人もいるであろう。しかし小説である以上、その代表者を選ばねばならない。

その代表者を、頭官のなかからはえらばなかった。

一組の兄弟をえらんだ。

すでに登場しつつあるように、大東亜諸国連合は日本の東海道（道はみち）道ではなく、北海道の道と同じ、すなわち地方という意味である。22世紀末には日本は道州制を採用していた。）は三浦半島のひと、古代守と進である。この兄弟は、奇跡を演じた人々のなかではもつとも演者たるにふさわしい。

たとえばこうである。ガミラスと戦うにあたってどうにも彼我の科学力の差は埋めがたい。なんとか敵艦一隻を捕獲し、技術を盗めないものか。

艱難辛苦の末、なんとか盗んで最初に完成した外宇宙航行型宇宙船が宇宙戦艦大和^{ヤマト}であった。

運命が、この兄弟にその責任を負わせた。兄の守は心魂をかたむけガミラス戦法の研究をし、ついに敵戦艦を無傷で鹵獲する工夫を完成し、

当時銀河一ひよわな地球連合艦隊をおとりにつかい、空間騎兵隊を率いて決戦にのぞんだ。冥王星宙域において凄惨きわまりない犠牲の間隙をぬってかろうじて敵戦艦一隻をからめとった。

弟の進は宇宙戦艦大和に乗り込んだ。

「宇宙戦艦大和は古代進と共にあった」

といわれたこの人物は、宇宙戦艦大和の全生涯のすべてに乗艦したただ一人の乗組員である。初代艦長沖田十三の時に新米士官として配属され、銀河100年戦争の最後の段階では、地球連邦宇宙軍第十七艦隊提督として旗艦宇宙戦艦大和に乗り込み、A銀河連合艦隊の崩壊を首の皮一枚で食い止め勝利に導くこととなる。

戦闘だけでなく、白色彗星要塞との最終決戦である「第三次地球宙域会戦」の序幕の名口上というべき

「敵要塞ノ中心核確認トノ報ニ接シ、本艦ハ直チニ出動、之ヲ撃滅セント波動砲ノエネルギーを充填、発射ス。残存艦隊ハスマイヤカニ包圍殲滅作戦ニ入イラレヨ。決戦宙域太陽光充分ナレドモ月近シ」

という電文の起草者でもあった。

この兄弟がいなければ地球はどうなっていたかわからないが、そのくせこの兄弟が、どちらも本来が軍人志望でなく、いかにもこの当時の歴史的諸事情から世にでてゆくあたりに、いまのところ筆者はかぎりない

関心をもっている。

少年のころの性行は、かならずしもその少年の将来を占わない。銀河一〇〇年戦争で、あれほど剛胆な戦闘指揮を行った古代進は、六つになつても寝小便をするくせがなおならず、近所のこどもたちから「古代の寝小便たれ」とからかわれた。からかわれても進は気が弱くて言いかえしもできず、すぐ泣いた。ときどき近所のこどもたちにまじって、すぐ近所の狭塚川の河川敷の公園などであそぶことはあったが、たいていは泣かされて帰ってくる。しかも家までの間100mも200mもべそべそと長泣きをしながらもどつてくるために、近所ではだれでも、

「古代の泣き虫」

といえば「ああ、古代医院の洩たれのことか」といった。進はこの時代にはめずらしくアレルギー性鼻炎の気が強かったのか、五・六さいころまで洩かたれつばなしであった。七歳になり、三浦区立第二小学校に入学した。

ところが、入学するとほとんど毎日泣いて帰ってくるし、授業中は上空で、窓の外ばかり見ている。ある雨の日、学級担任の火須照子が家庭訪問に来て

「この子は、学校教育に適応しかねます。専門機関に相談されてはいか

がでしようか。」

といった。もちろん、学校は最善の努力もしたであろうし、ましてや進を見捨てたわけでもない。

しかし、言われたほうはそうはとらない。このときだけは父の武夫も「えらい子をひきとつたものだ。この子は将来ひとり立ちもできず、一生わしのすねかじりで終わるのか。」

兄の守さんもりもにがい顔をしていたが、幼馴染の平田静子しやうじだけはくすくすと笑い、

「いいえ、進すすちゃんはそのすねかじりにはならない。ひよっとすると日本はおろか、地球に名をのこすかもしれません」

「寝小便ねせうべんの洩たれでもか」

「はい」

静子は古代家の隣に住む女の子で、ひきとつたはよいが、亜紀子が忙しくなかなか進にかまってやれなかったから、わずか六つ上ながらも、進をおぶったり、添い寝をしたりして今日こんにちまで育ててきた（と、少なくとも本人は思っている）。進に対しては、若い母のような気持ちでいたし、あるいはそれ以上だったかもしれない。それほど幼いころの進は、手のかかる子であった。

進の同級生で、中学を主席で卒業した久保田某ながしの母などは、

「よくぞまあ、あれほどまでにお育てになりました。いいにくいですが、進君はえらい泣き虫の問題児でしたからねえ」

と、進が総合武術のスポーツ推薦によって、息子と同じ東京の名門高校に進学すると決まったとき、その巨体を揺らしながら言葉遠慮につぶやいたという。

静子には、進にかけているひとつの信仰があった。

ももとの進の名前はミル・エスパノスキー Jrジュニアといった。養父の武夫は豪気なところがあつたので

「古代ミルでいいじゃないか」

と言つたが、母の亜紀子がいやがり、

「ミルなどと言う名は日本では女の子みたいでいじめられますよ」

と、心配した。もつとも、口には出さなかったが、兄が守で弟がミルでは養子だとばれてしまつて、いじけた子供になってしまうのではないかと亜紀子は心配していた。

「なるほど、女の子みたいか。これはあやういところだった。兄が守だから弟も漢字一文字の名前が良いかな」

と、考えに考えたすえ。武夫の兄、守さんもりには叔父にあたる宇宙考古学者の古代守翁の共同研究者だつた二本足進すすむからとつて進すすむと名づけ

た。亜紀子は二本足進が学者としてはともかく、容姿がばつとせず私生活もだらしないうえによく知らない人には愚鈍ぐどんな人間にしか見えない所がひっかかったが、武夫は

「あの先生は立派な学者だし、何より兄が世話になった。」

とご満悦だった。ところが長ずるにしたがつて、意外に愚童ぐどうだったために亜紀子は、

「やっぱり、名前が悪かったのかしら。しかもあの愚鈍な様子では学者にさえなれそうもない」

と嘆いた。しかし静子は、そうはおもわなかった。寝小便たれの洩たれ小僧で、小学校の勉強もできない子だが、こどもにも骨相こつさうというものがある。静子は気のせいか、見ているとどこことなく茫洋とした味があるようにおもわれるのである。進の兄の守にそれをいうと、大食いの守もりさんはずいぶん三時のおやつがわりににカップラーメンを喰っていたときだったが、麵をふきだして笑った

「でも、ほかのこどもとくらべると、どことなしに目のひかりがちがいますよ」

「あいつは、俺と同じで白人の血が入っている。だから目の色が少しすすいのだ」

「目の色だけではなく。どこか遠くを見ているような感じがします。あ

の感じは、進ちゃんだけがわかる未知の世界を遠望しているにちがいない」

静子があんまり熱心にいうから、この少女のいうとおり進は大器晩成なのかも知れないと守さんは少し信じるようになった。

しかし、ばかにはできない。

ひよっとすると静子の予言があたるかも知れないと守さんがおもいはじめたのは、進が八歳のときからであった。この少年は城ヶ島に総合武術の道場をもつ裸田らだたいざん大山のもとにかよいはじめてから顔つきまでかわってきたのである。

4

総合武術とは、疑似体験服バーチャルスーツの進歩によつて、それまで危険でできなかった真剣勝負をバーチャルの世界で可能にしたものである。もちろんバーチャルの世界だから実際にけがなどをするわけではないが、例えば足にダメージを受けた場合足の動きが疑似体験服によつて相応に動きが鈍くなったりする。危険がないために、ルール無用で相手が戦闘力を失うまで闘うことができる。二十一世紀の格闘技である。柔道、ボクシング、中国武術なんでもござれで、素手以外にも、剣術などの武器部門もあり、その武器の長さなどで細かく分類されている。

北辰一刀流裸田らだたいざん大山の道場は、城ヶ島の馬ノ背洞門といわれる景勝地

が間近にのぞめるところにある。秋から冬の空気がすんでいるときは、遠くに富士山がのぞめる、市内でも景色のいい一角にあった。

裸田大山たいたさんの武術の基本は北辰一刀流剣術である。もともと、ルール無用の総合武術、ほかに柔道、空手道、合気道にも通じていた。腕前は東海道随一と言われている。

この男には武術以外にも志があり、武術で鍛錬した心技体を惑星開発にかけようとし、神代計画かみよに志願した。硬化テクタイト処理（金属にテクタイトという物質をコーティングすることにより性能をいちじるしくあげる技術）した家伝の名刀一振を抱え、移民船団に乗り込みプロメテへ旅立った。前述の通り計画は失敗し九死に一生を得た十四人の中のひとりとなり、命からがら帰ってきた。

この先生は、惑星移民があきらめきれず、ネオ・ムー帝国特別州のドップラーが、移民志願者を募集したのをきいてとびついた。残念ながら落選してしまったが、この年の三月に出発したドップラーの宇宙船は、月軌道あたりで爆発して志願者の全員が犠牲になってしまった。世界中から無謀な人体実験だったのではないかと非難されたドップラーだったし、大山たいたさんのまわりのものも

「落選して命びろいしたな」

と誰もが、大山たいたさんの強運をほめたが、

「宇宙開発に事故はつきもの、命が惜しければ志願などしなければいいのだ。わしは、これからもチャンスがあればプロメテ計画でもドップラーでも志願する。」
と、うそぶいた。たいした度胸である。

こんな大山たいたさんだから稽古もひどく荒っぽい。疑似体験服バーチャルスーツは高価なものだから個人経営の道場などでは大量に所持できるわけがない。自然、稽古は実戦形式で行われる。八歳の進も、ずいぶんやられたらしい。

5 入門後、二月ほどすると先生が進の顔をのぞき、

「おまえ、なにか変だぞ」

と気味悪そうにのぞきこんだ。理由は話さない。

進は、週に三日道場にかよった週末には静子がまっている。

「庭に出なさい」

これが決まった行事だった。静子は中学の総合武術部に所属しているらしく、防具をつけず、竹刀を一本もったきりである。

「進ちゃん、おさらい」

今週習ったとおりうちかけてこいという。

「女と思つてなめないでね」

なめるどころではなかった。この風変わりな娘は、進がいくら攻撃しても、ばんばんと竹刀をはねあげてしまう。

——それから半年ほどして道場の裸田大山が以前とおなじように進の顔をのぞきこんだ。

「やっぱり変だ」

のぞきこまれた進がなんとなく不機嫌な顔をしていると、

「顔がかわった。入門してきたときは、別の人間じゃ。物のたとえて、うまれかわったように、とよくいうが、やはりそういうことが世の中にはあるのだな」

進の顔は、別人のようにひきしまっている。

「昇のぼさん」

といわれた森本昇は学年で一番背が低かった。逆子で産まれてきた昇の出産は大変な難産であった。その影響か、昇は心臓に持病があり、十歳になって手術をするまで運動ができなかった。成長が遅いのもそのせいであったのかもしれない。産後のひだちちがわるかったのか、昇の記憶の中の母はいつも床にふせている。その母も昇が四歳の時無くなつて、父一人子一人の父子家庭でそだった。そのために食事メニューに大きな偏りがでてしまったのが、あるいは低身長の原因かもしれない。

6

進と昇は小学校五年生の時にはじめて同じクラスになった。そのころの進の交友関係は裸田道場関係が中心であった。一番の友達は丘譲おかじょうじで同学年では進の次の実力者だった。親分肌の性格で面倒見がよく、いつも腕白仲間数人をひきつけていた。進は大将になりたがる性格ではなかったが丘譲二の子分というわけでもなかった。なんとなく気が合つてよく一緒にいた。たとえば悪いが、太古の任侠の世界でいう、丘一家の客分というような立ち位置が案外近かったように思える。そんな進だから、運動ができない昇との接点などなかった。

進たちの五年生の秋の遠足は横須賀だった。

横須賀には大東亜諸国連合最大の海軍基地があり、第三次世界大戦の戦勝記念として海軍博物館が併設されていた。海軍博物館には第三次世界大戦中の日本の主力艦やまあらしであった、山嵐級双胴ミサイル巡洋艦の浜風やイージス駆逐艦大波おきなみ。古くは日露戦争のときの戦艦三笠みかさなどが展示されていた。その他にも、日本海軍誕生以来の名艦を、疑似体験するこどもできる、日本海軍／大東亜諸国連合海軍の全がわかるという一大テーマパークであった。もつとも、子供たちの一番人気は、博物館の中央広場に展示されている、ハリボテながら水線上の外見だけは再現された第二次世界大戦中の戦艦大和やまとであった。

「こんなでつかい艦はみたことがない。こんな強そうな戦艦があったんだから日本は勝つたんだらうな」

丘譲二がのんきにつぶやいた。

「大和は第二次世界大戦中の戦艦、そのときの日本は戦争にボロ負けしたよ」

横から森本昇がきつぱりといった。喧嘩っ早い譲二は面目をつぶされ、昇をにらみつけたが、昇はどっこ吹く風と平然としている。昇は体がちいさく運動もできなかったがこういうところがあつた。

なめられたとおもい譲二は昇の胸ぐらをつかんだが、まったく動じない。

——これは殴るしかないかな——

と、譲二が観念したときに進が止めに入った。

進は昇を助けたというより戦艦大和のことがききたかつた。

「お前よく知ってるな。おれにも大和のことを教えてくれんか」

昇はお礼も言わずに。

「大和は、1941年に日本が建造した史上最大最強の戦艦で・・・」

と、いうところから大和の説明をはじめた。

大和は、歴史上もつとも強力な大砲を搭載した、世界最大最強の戦艦

である。残念なことに第二次世界大戦開始早々に世界に先駆けて日本海軍の空母機動部隊が、戦艦に対して航空攻撃の優位性を証明してしまった。つまり、戦艦を時代遅れの遺物としてしまった分だけ。史上最大最強の戦艦といわれた大和級二隻にしても、なんら戦局に関与することなく戦艦航空機の攻撃により海のもくずと消えた。

第二次世界大戦後は、大砲と違い、発射のときの反動が少なく小型艦からでも発射可能なミサイル艦が主流となった。

——それから戦艦はどうなったのか——

進はきいてみた。

7

戦艦もしばらく在籍したが、1970年代にはいったん海上から姿を消してしまった。ところが1980年代に、アメリカは、その所有する最大の戦艦アイオワ型に巡航ミサイルを搭載してミサイル戦艦として復活させた。それは、当時冷戦で対立していたソビエト連邦が建造したキーロフ級ミサイル戦艦やキエフ級ミサイル航空戦艦に対抗したものである。もつとも、それらの戦艦も1989年の冷戦終結により存在意義を失い1995年には全て退役してしまつたのだが。

——第三次世界大戦にもミサイル戦艦は使われたのか——

進は、戦艦のことがもつと知りたくなつた。

第二次世界大戦でのミサイル戦艦は、アメリカのゲティスバーグ級六隻の活躍が有名である。その他には、中国の泥武級三隻、ヨーロッパ連合海軍に二隻のミサイル戦艦が存在した。海軍博物館に展示してある日本の双胴巡洋艦浜風なども排水量17500tを誇り、あるいはミサイル戦艦とよべるかも知れない。

—— 日本は本格的なミサイル戦艦は造らなかったのか ——

実は、第三次大戦末期に建造しようとしていた。

ミサイル戦艦眞秀場である。

第二次世界大戦初頭に、日本国防海軍は最新鋭双胴ミサイル巡洋艦山嵐、砂嵐二隻をふくむアラビア派遣艦隊が壊滅するという大敗北を喫したことがあった。第二次世界大戦の反省から、日本は敗北の情報もつつみ隠さず国民に知らせた。ところが、これが裏目に出て国民の士気が思いのほか低下してしまった。あせった政府の中から。

「景気づけに戦艦大和でも造ってはどうか」

というはなしがもりあがった。

戦艦大和は先に述べたとおり、世界最大最強の戦艦で日本海軍の象徴的といつてよい艦である。

もつとも大戦中は国民にも秘密とされていた。大戦後、一般の国民の

知ることとなった大和はその高性能を惜しむ声と、

「一億総特攻のさきがけ」

と呼ばれた、沖縄への米軍の上陸に対抗すべく、わずかな護衛艦艇のみひきつれた航空機の援護なき特攻作戦による悲劇的な最期。そして何よりその美しい艦影により、国民的人気が沸騰した。戦後はもちろん二十世紀にいたるまで数多くの映像、漫画、小説などのコンテンツとして世界で最も自国民に愛された戦艦であり続けた。

第三次大戦中にはステルス性の向上などレーダー兵器の無力化が進む中、ミサイル戦艦の有用性が一部でささやかれていた。事実、他国での活躍にも刺激された海軍は、国民の士気を高めるために、国民を束ねる国防海軍の象徴的な艦船として超大型ミサイル戦艦を建造しようという提案がなされたわけだ。もちろんアメリカや中国のミサイル戦艦への対抗の意味もあつただろう。

海軍の象徴という意味から

—— デザインを戦艦大和のイメージにできるだけ近づけること ——

と、排水量10万トンを超えるこの新造艦には条件がつけられた。設計を担当した沖重造博士はそれを忠実に守り、日暮れ時に見たら戦艦大和と見まごうばかりの設計がなされた。艦名も当初は大和とつけられる予定だったが、多くの日本国民が大和は戦艦大和だけでよいと別の名を

のぞんだ。そのため、古事記のなかで大和武尊が詠んだとされる

——大和はくには眞秀場 たたづく青垣山隠れる 大和し麗し——

という唄から、大和と同義語の眞秀場と名づけられた。

結果として、ミサイル戦艦眞秀場は第二次大戦には間に合わなかった。

大戦最末期に一度だけ出撃したという文献もあるが、信憑性はうすい。

九割以上は完成していたようだが、戦後の軍縮の中で、解体された。と当時の公式記録には記されていた。

「古代、うちに遊びに来ないか」

と、学校の帰りに、森本昇が進をきそつたのは、それからしばらくしてからである。

「なにか、戦艦の新しいはなしでもあるのか」

と進がいうと

「まあとにかく来てみてみる」

とはぐらかした。昇のつかみどころのない雰囲気はこのころからめばえている。結局同行した。

昇のマンションは、三浦半島沖に浮かぶ海上都市G・11、通称練馬

海上都市にある。海上都市は本来都市内の小学校にかよすが、昇のマン

ションは、三浦半島からの連絡路に近く、特別に本土の小学校にかよぐ地区にあった。通された昇の部屋は、殺風景ながら、本箱などには歴史のデータベースでいっぱいだった。

その日、誘った理由はネット上でおかしなブログを見つけたということだった。ブログの主は、土田司郎つちだしろうといった。もちろんブログネームで本名ではなかっただろう。土田司郎は、ブログ上に小説やマンガ、あるいは書評などを掲載するその道では売れっ子の一人であった。問題の記事はというと

9 ——— ミサイル戦艦眞秀場の元乗組員に会った ———

というものであった。

そのブログは森本昇がダウンロードして保存していたため、文面を現存でも読むことができるので以下に掲載する。

ミサイル戦艦眞秀場の元乗組員という老人と会った。

先日、近所のアパートで火事があった。住民はみんな飛び出してきたが、逆にアパートの中に飛びこもうとしていた老人がいた

「まほろばが燃える。まほろばが消えてしまう」

こう叫びながら燃えさかる炎の中に飛びこんでいった。自分はあわて

て後を追った。炎につつまれた老人の部屋でみたものは巨大な軍艦の写真パネルであった。老人はそれをとりはずそうとしたがもう間に合わない。パネルに火が回ろうとする寸前に持っていたデジカメでパネルの写真を撮り、無理やり老人を外に連れ出した。

全身やけどで気をうしなつた老人は救急車で運ばれて行った。

後日談がある。

老人は、病院を抜け出し自分を訪ねてきた。

「どうせこの怪我ではわしは助からない、死ぬ前にもう一度きみが撮つたまほろばをみせてほしい」

「気迫に圧倒されて撮った画像データをプリントアウトしてお見せした。

—— 排水量10万800噸^ト。26万馬力、速力33ノット。地球上

最大艦船。歴史上最後の大戦艦真秀場。——

写真は、第二次世界大戦末に日本が建造したミサイル戦艦真秀場が、

最初で最後の出撃をした時の写真だそうだ。

「わしは、そのとき戦艦まほろばの戦闘艦橋に鋼鉄の床を踏みしめて立っていった」

と、老人は語ってくれた。結局、真秀場は大戦終結により実戦に参加することなくむなしくひきかえした。戦後の真秀場がどうなったかはよくわからないが、解体されたという話はいきかなかつた。どこか

で大切に保管されているはずだそうである。老人は写真を見ながら満足そうに息を引き取った。合掌。

模型かCGかと思ひ画像解析を試みたが、自分にはどうしても本物の写真のようにしか見えない。老人の命がけの訴えがウソとも思えない。

伝説の戦艦真秀場は実在したと信じたいものである。

この文のあとに、炎の中で少しぼやけた戦艦大和によく似た軍艦の写真が掲載されていた。よく見ると、主砲塔のかわりに、カートリッジ式大型ミサイルポットらしいものが五基艦上に並んでいた。

10

「創作じゃないのか」

と進はうたがったが、昇はこの土田司郎という人はネット界でも有名なブロガーだ。ウソについてまで人気を取るようなことはないはずだといつた。

この記事は次の日には削除されていた。理由はわからない。

第二話 了

次回第三話 「空間騎兵」